

# 注文の多い料理店

宮沢賢治

青空文庫



二人の若い紳士しんしが、すつかりイギリスの兵隊のかたちをして、  
ぴかぴかする鉄砲てつぽうをかついで、白熊しろくまのような犬を二疋ひきつれて、  
だいぶ山奥やまおくの、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云い  
いながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここらの山は怪けしからんね。鳥も獣けものも一疋も居やが  
らん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見た  
いもんだなあ。」

「鹿しかの黄いろな横つ腹なんぞに、二三発お見舞みまいもうしたら、ずい  
ぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたつと倒たおれ  
るだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついて、どこかへ行つてしまつたくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物もの凄すごいので、その白熊のような犬が、二足いっしょにめまいを起こして、しばらく吠うなつて、それから泡あわを吐はいて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼まぶたを、ちよつとかえしてみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じつと、もひとり

の紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻ろうとおもう。」

「せいじや、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、

山鳥を拾じゆうえん円えんも買って帰ればいい。」

「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰ろうじゃないか」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっつこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木

はごとんごとんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さつきから横つ腹が痛くてたまらないんだ。  
」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ。」

「喰<sup>た</sup>べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云い  
ました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一<sup>いっけん</sup>軒の西洋造りの家が  
ありました。

そして玄<sup>げんかん</sup>関には

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちようどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるところだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「はいろうじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなん

だ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸せとの煉瓦れんがで組んで、実に立派なもんです。

そして硝子がらすの開き戸がたつて、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮えんりよはありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただでちそうご馳走するんだぜ。」



「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下ろうかになっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ふとったお方や若いお方は、大歓迎だいかんげいいたします」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗ぬりの扉とがありました。

「どうも変な家だ。<sup>うち</sup> どうしてこんなにたくさん戸があるのだろうか。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」  
そして二人はその扉をあけようとしみますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」  
「それあそくだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りに  
はすくないだろう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて支度したくが手間取るけれどもごめん下さいと斯こういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか室へやの中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座すわりたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄えのついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪かみをきちんとして、それからき

もの

の泥どろを落してください。」

と書いてありました。

「これはどうも尤もつともだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつ

て見くびったんだよ」

「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉えらい人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴くつの泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否いなや、そいつが

ぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室の中に入つてきました。

二人はびつくりして、互たがによりそつて、扉をがたと開けて、次の室へ入つて行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途方とほうもないことになつてしまふと、二人とも思つたのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸たまをここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持つてものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きま  
した。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子ぼうしと外套がいとうと靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによつほどえらいひとなんだ。奥に  
来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートくぎを釘くぎにかけ、靴をぬいでぺたぺた  
あるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡めがね、財布さいふ、その他金物

類、

ことに尖とがつたものは、みんなここに置いてください」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちやんと口を開けて置いてありました。鍵かぎまで添そえてあつたのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金かな気けのものはあぶない。ことに尖とがつたものはあぶないと斯こう云うんだらう。」

「そうだらう。して見ると勘かんじよう定じようは帰りにここで払はらうのだらうか。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きつと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな

金庫のなかに入れて、ぱちんと錠じょうをかけました。

すこし行きますとまた扉とがあつて、その前に硝子がらすの壺つぼが一つありました。扉には斯こう書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗つてくださ  
い。」

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだらう。室へやのなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」



二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこつそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか  
、」

と書いてあつて、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。ここの主人はじつに用意 しゅうとう 周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何

か喰べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」  
するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶びんの中の香水をよく振りふにかけてくださ

い。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へばちやばちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酔すのような匂においがするのでした。

「この香水はへんに酔くさい。どうしたんだらう。」

「まちがえたんだ。下女が風邪かぜでも引いてまちがえて入れたんだ。」

二人は扉をあけて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。」

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさん

よくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともぎよつとしてお互にクリームをたくさん

塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもう。」

「沢山たくさんの注文というのは、向うがこつちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家うちとこういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」「がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……。うわあ。」がたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

「遁げ……。」「がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押さうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、

「いや、わざわざご苦労です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉めだまがこつちをのぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、<sup>まぬ</sup>間抜けたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉くれやしな  
いんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいつて来なかつたら、それはぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしやい。い

らっしやい。いらっしやい。お皿せうも洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしやい。」

「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダはお嫌きらいですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしやい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑かみくずのようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふっふつとわらってまた叫さけんでいます。

「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては折角せつかくのクリムが流れるじやありませんか。へい、ただいま。じきもつてまいります。さあ、早くいらつしやい。」

「早くいらつしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもつて、舌なめずりして、お客さま方を待つていられます。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声が出て、あの白熊しろくまのような犬が二疋ふき、扉とをつきやぶつて室へやの中に飛び込んできました。鍵かぎ穴なの眼玉はたちまちなくなり、犬どもはうとうとなつてしばらく室の中をくるくる廻まわつていました。また一声



「わん。」と高く吠ほえて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、

「にやあお、くわあ、ごろごろ。」という声がして、それからがさがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴くつや財布さいふやネクタイピンは、あっちの枝えだにぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。風がどうと吹ふいてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごん

ごとんと鳴りました。

犬がふうとうなつて戻もどつてきました。

そしてうしろからは、

「旦那だんなあ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

二人は俄にわかに元気がついて

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」と叫びました。

箕みの帽子ぼうしをかぶった専門の獵り師やうしが、草をざわざわ分けてやっ

てきました。

そこで二人はやつと安心しました。

そして獵師のもつてきた団だんご子をたべ、途とちゆう中で十円だけ山鳥を

買つて東京に帰りました。

しかし、さつきーペン紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいつでも、もうもとのとおりになおりませんでした。



# 青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部

・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 注文の多い料理店

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>